【2019年10月 25日発行】
THE JAPAN SOCIETY FOR INTERCULTURAL STUDIES
日本国際文化学会ニューズレター43号
http://jsics.org/

日本国際文化学会事務局
多摩大学
グローバルスタディーズ学部事務室内
〒252-0805
神奈川県藤沢市円行802番地
Tel: 0466-82-4141
Fax: 0466-82-5070
Email: jsics@gr.tama.ac.jp

第18回全国大会（長崎大学開催）報告およびお礼

第18回全国大会実行委員長　葉柳 和則
（長崎大学）

2019年7月6日（土）～7日（日）、長崎大学文教キャンパスにて、第18回全国大会を開催させていただきました。九州地方を悪天候が見舞う中、95名の方に参加していただけたことは大きな喜びです。大会期間中は幸運にも天候が崩れることもなく、二日目の最後のセッションまで予定通り終えることができました。

今大会は全体のテーマとして、「East meets West in Nagasaki――文化の際会、混淆、共生をめぐって」を掲げました。長崎は、近世から近代初期まで、東西文化の出会いのインターフェイスでした。ローマ法王に寄進されていた1600年頃には既に、二つの文化の出会い、混ざり合い、共存が生まれていました。もし、私たちがこの時代の長崎にタイムスリップするなら、嬉々としてフィールドワークを始めたことでしょう。国際文化学に関するみなさまの議論が、長崎の地において、いっそう深化し、あるいは飛翔するための補助線を大会テーマが提供できたとすれば、実行委員会としてこれ以上の幸いはございません。

5件の共通論題、9件の自由論題のテーマは、直接的に東西の出会いを扱ったものから、「他者」あるいは「異他的なもの」との邂逅まで、さらには教育実践まで多岐にわたりました。しかし、いずれの報告や議論の中にも、「文化の際会、混淆、共生」という論点を感じ取ることができました。

公開シンポジウムの基調講演では、香港大学の王向華先生に、From Culture as a Code to Culture as Practiceという論題でお話しいただきました。二つの文化概念の比較に始まり、これが香港、台湾、大陸中国の国民形成にどのように関係しているのか、文化産業と「実践としての文化」はいかなる問題の布置を構成しているのかといった論点に関して、具体的な事例を挙げながら議論が展開されました。最後には、日本国際文化学会の20周年記念大会を香港大学で開催してはどうかというご提案までいただきました。講演を受けて、白石さや先生、鈴木章能先生、細田尚美先生によるパネルディスカッションが行われ、王先生のご講演の輪郭がいっそう明確となりました。

フォーラムでは、植野雄司先生の司会の元、学会の外部からもゲストスピーカーをお迎えして、「私の国際文化学」というテーマで報告がなされました。坪井睦子先生、吉田栄人先生、吉岡剛彦先生、久松英二先生、相原征

パネルディスカッションでのひとこま

代先生という、通常は決して一堂に会することのない研究者が、「国際文化学」を鍵語にして議論を展開するという方法によって、この学問の学際的な広がりを確認できる稀な機会が生み出されました。

今回の大会実施には、長崎大学の教員に加えて、18名の多文化社会学研究科の院生が参加しました。昨年度設置されたばかりであるため、ほとんどが初めて学会というものに関わりました。彼らがそれぞれの持ち場で、学会運営や学術的議論のなんたるかを経験できたことは、必ずや彼らの将来に資することでしょう。

7月5日（金）のエクスカージョンは、「外海の潜伏キリシタン遺跡を訪ねて―― East meets West in Sotome」と題して、遠藤周作の『沈黙』の舞台の一つである長崎市の外海地区を回りました。ほとんど奇跡のように晴れ間の見える一日となり、エクスカージョンの最後には東シナ海に沈む夕陽を堪能することができました。詳細については別項をご覧ください。

まだ設置されて間もない多文化社会研究科が中心となって開催させていただいた第18回大会が、大過なく実施されたことは、準備の段階からの会員のみなさまによる多大なるご協力、そして運営に対する寛容の心のおかげに他なりません。実行委員会のスタッフを代表して心から御礼申し上げます。

2019年度ICCO短期集中セミナー報告

松居 竜五　（龍谷大学）

2019年8月25日から31日にわたって、今年度のICCO短期集中セミナーが、京都市伏見区の龍谷大学深草学舎で開催されました。例年、応募数がなぜか受け入れ上限の30名弱で収まるというたいへん幸運なジンクスがあるのですが、今回も29名という願ってもない結果でした。うちわけは、青山学院大学6名、甲南女子大学5名、山口県立大学4名、龍谷大学4名、名桜大学3名、文教大学2名、宮崎公立大学2名、多摩大学1名、新潟県立大学1名、ノートルダム女子大学1名と、新たな参加校も含めて10校から参加者がありました。

この29名が、10のグループに分かれて、それぞれのテーマに沿ってフィールドワークをおこないました。初日の岩野雅子前会長による講演や岡真理子前審査委員長による報告書の書き方に始まり、今回も多数の学会員がボランティアで駆けつけて、アドバイスをしていただきました。とは言え、最初からメンバーの息がぴったり合っているグループもあれば、なかなかテーマが絞れず日々四苦八苦のグループもありで、例年通りスリリングな展開が見られました。最終的な発表テーマは下記のようなものです。

A班「外国人観光客の片思い」
B班「地域が背負う葛藤―ランリックが向かう未来」
C班「あきまへんの向こう側」
D班「げすとはうす　おこしやす」
E班「東九条と大阪―商店街から見えてきた現状と原因」
F班「キャッシュレス化が進まない街、京都」
G班「グローカルの光と影」
H班「エコ×修学旅行」
I班「輪！WA！お地蔵さん！」
J班「和の京都に膨らむ洋のパン」

セミナーも5年目に入り、年々レベルが上がっていることが体感できました。その分、最終日の発表会では、フィールドワークの内容も然る事ながら、最後のプレゼンの完成度が評価の分かれ目になっていたかもしれません。大学はもとより、出身地域や年齢の異なるメンバーそれぞれの個性を活かすことが重要で、参加者の声を聞いても、その点にこのセミナーの面白さがあるようです。

とは言え、主催者として来年度に向けて、テーマに関しては少し注文もあります。一つは、「京都」という対象のイメージからか、「観光」に偏ったプロジェクトの提案が多かったことです。たしかに京都は観光都市ですが、その背景には明暗の両方に関わる歴史があります。また、拠点となった龍谷大学深草学舎は京都市内だけでなく、大阪、奈良、神戸、大津などの近隣都市にもアクセスのよい場所です。そうした京都を含めた関西圏の広い地域を対象とした、柔軟な発想やスケールの大きな構想を持ったプロジェクトを、申請書の段階で考えておいてほしいと思っています。

このセミナーの主役はもちろん参加している学生ですが、その裏には日本国際文化学会に関わる各参加校の教員の存在があります。どうか今後も、申請段階から学生の指導に関わって、このセミナーを全体として盛り上げていただけますようお願い申し上げます。ICCO資格制度を学会の貴重な資産として、さらに実り豊かなものに育てて行ければと考えています。

参加者揃っての集合写真

2020年度第19回全国大会に向けて

高橋 梓　（近畿大学）

日本国際文化学会の第19回全国大会を近畿大学法学部で開催することとなりました。

全14学部を要する近畿大学には「文芸学部」「総合社会学部」「国際学部」など、国際文化学のイメージと近接する学部が複数存在します。その中でなぜ「法学部」が名乗りを上げたのか疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。

このたび大会実行委員長を務める私・高橋は、法学部で主にフランス語を教える教員です。法学や政治学を専門とせず、教養・基礎教育を担当する教員が各学部に所属しているのが本学の特徴です。近畿大学は、「異質な価値や文化を理解し、自国の伝統や文化の意味を再発見する国際感覚を、身に付けていること」を全学のディプロマポリシーとして掲げています。法律や政治を主として学ぶ学生に、国際感覚を与えることが我々の役割です。

近畿大学法学部と日本国際文化学会の関係は、2016年に始まります。本学では、主に一年生を対象とする「国際化と異文化理解」が開講されています。私は着任した2016年度から法学部の「国際化と異文化理解」を担当することとなりました。「国際」と「異文化」という二語を内包する本講義を作っていく中で、「国際文化学」に自然と接近することとなり、2016年度の第15回全国大会から毎回参加しております。講義では主にフランスの文学作品を題材として、異文化の視点を身体化させ、学生自らが「間文化」を自覚的に生きる存在となることを目標としています。

国際文化学の基礎を身につけた学生たちの学習意欲は非常に高く、私設の研究会では数名の学生と「異文化の視点で地域を探究する」という試みを実践しています。異文化を学ぶ学生の関心が日本の地域文化に向かう現象は極めて興味深く、近畿圏にとどまらず、様々な地域に学生と調査に出かけることが珍しくなくなりました。ただ、残念なのは国際文化学の授業実践が1～2年次の基礎教育で終わってしまうことです。本学部で法学や政治学を専門的に学ぶ学生たちから、文化の知見を切望する声が聞こえることもしばしばです。近畿大学での日本国際文化学会全国大会の開催は、私はもちろんのこと、国際文化学に関心を持つ学生たちの願いでもあります。

近畿大学は、かつて「河内国」と呼ばれた東大阪市にあります。万葉の昔からの歴史文化に富む、といった「魅力」を語るのは容易ですが、過疎や貧困と言った課題と常に隣り合わせており、人権に関わる深刻な問題と近しい都市でもあります。エクスカージョンでは河内の文化史を通じて、国際文化学を学ぶ我々が地域文化を生きる意味を改めて考えるきっかけにできれば幸いです。

非力ではありますが、第19回全国大会の成功のため尽力して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

次期全国大会
2020年7月11・12日　近畿大学
（10日にエクスカージョンを予定）

共通論題・自由論題の応募をお待ちしております。

【共通論題の募集】締め切りは2019年12月末（必着）

【自由論題の募集】締め切りは2020年3月20日（必着）

事務局からご連絡

・学会費に関して

学会費を未納の会員の方がいらっしゃいます。お手数ではございますが早期の納入をお願い致します。

・住所・所属変更に関して

ご住所・ご所属等の変更がございましたら学会事務局までご一報いただければ幸いです。

第18回　全国大会　発表要旨

【共通論題１】研究者トライアンジュレーションで見えてくるもの ―カザフスタンの英語教育推進事業を事例として

岩野雅子（代表）、バジルガラモヴァ・アセル、アクメトバ・サルタナ、大場智美

共通論題1では、「研究者トライアンギュレーションで見えてくるもの―カザフスタンの英語教育推進事業を事例として」をテーマに4名からの報告と討議を試みた。報告者は、岩野雅子（共通論題代表者、山口県立大学国際文化学部教授）、サルタナ・アクメトバ（ナザルバエフ大学社会学准教授）、アセル・バジルガラモヴァ（英国ラフバラ大学中央アジア地域マネジャー・カザフ国立女子師範大学英語非常勤講師）、大場智美（多摩大学グローバルスタディーズ学部専任講師）である。質的研究の妥当性を高めるために、複数の研究者による三角測量（トライアンギュレーション）を用い、①日本人とカザフ人研究者が同じ場所を訪問し観察・聞き取りしたことを検証、②アスタナ（首都）とアルマティ（旧首都）からの2名のカザフ研究者がアイデンティティ・言語教育・グローバル人材育成といった視点を検証、③日本人2名の研究者（都市部、地方）が英語教育やグローバル人材育成といった観点から、カザフスタンの「国家的な社会実験」のなかで、特に高等教育改革と社会への影響について検証という、3つのトライアンギュレーションを試みた。

第一報告者の岩野からは、多言語社会カザフスタンに関する研究の背景について説明、第二報告者のアクメトバは、カザフスタンのアイデンティティ統合への新たな挑戦について報告。さらに、第三報告者のバジルガラモヴァがカザフスタンの3言語一体化政策と大学・学校現場における英語教育の現状について報告した。歴史的、政治的、社会的な背景のもとで、言語を道具に国家建設・国民統合・グローバル化推進を行う政府の政策により、カザフ語・ロシア語・英語の3つができる人材育成にむけ、モデル大学・学校から全国展開がなされ2020年という一つの節目を目前としている。この現状について、トライアンギュレーションを用いて事前に報告者間で確認した上での内容とした。最後に、第四報告者の大場が次の5つの観点から課題出しを行い、討論を進行した。①「国家の人材育成」と「人々の自己実現」とのギャップ、②3言語政策から生まれるアイデンティティとは、③地域間・階層間の格差、④3言語をCLIL＊で身につけさせるという方法論、⑤高等教育が社会に与える影響。一つ一つの課題については、今後継続的に追っていきたい。

＊Content and Language Integrated Learning。教科科目やテーマの内容（content）の学習と外国語（language）の学習を組み合わせた学習（指導）。「内容言語統合型学習」という。（日本CLIL教育学会ウェブサイトより　https://www.j-clil.com/clil）

【共通論題２】「暴力」と表象―政治と文化における接合点の模索

深松亮太（代表）、田島樹里奈、月野楓子、木原誠（コメンテーター）

本共通論題は、時代と地域を超えて広く行われてきた「暴力」や「抑圧」といった行為が如何に表象されてきたのか、あるいは表象という行為そのものが有した政治性について検討することを目的として企画された。ここでいう「暴力」とは、物理的な意味はもちろんのこと、他者に対する差別や偏見を含めた広い概念として捉えている。また「表象」についても同様に、他者をどのように認識するのかを含め、その認識を一定の意味を持って表出させる行為として捉えている。したがって、本共通論題では、第1報告（深松亮太）において暴力を扇動するものとしての「表象」を扱い、第2報告（田島樹里奈）では、Re-Imaging、すなわち「暴力」を想起させる歴史的事象に対する「イメージ」が描き換えられていった過程について検討した。そして第3報告（月野楓子）では、文化表象を通じた「募金活動」という事例を扱うことによって、静止的なものに留まらない「表象」を探求することに配慮した。以下では、それぞれの報告の内容を概観するとともに、コメンテーター及びフロアの反応を総括していく。

第1報告では、20世紀転換期の米国ノースカロライナ州における人種をめぐる政治的対立に注目し、黒人への恐怖を醸成するために用いられた風刺画の分析を行った。ここでは特に、支配／被支配関係の逆転のレトリックに注目し、物理的な暴力と性暴力の喚起が黒人恐怖を増幅させる上で重要であり、図像描写および紙面の文字言説双方において盛んに宣伝されたことを指摘した。

第2報告では、北アイルランドの壁画が、紛争という暗い過去を連想させるものから、日常的で明るいイメージへと転換されていく過程に注目することで、アート（文化）と政治の関係を間文化研究の視点から考察した。この考察から見えてきたことは、壁画そのものがコミュニティによる政治的な意思・主張を表出する媒体として機能していたことである。そしてRe-Imaging Communities Programmeは、大衆に

よる政治的意思・主張を抑制し、人々の内面的イメージまでをも「塗り替える」役割を果たしていたことを指摘した。

第3報告では、アルゼンチンの沖縄移民による第二次世界大戦後の沖縄芸能を通じた「救済活動」の意義について検討した。この考察によって示されたのは、沖縄芸能が在亜沖縄移民の紐帯を強化すると同時に、戦争という政治的苦境に抗う手段として機能していたことである。さらには、この文化活動が形成した組織的活動は、アルゼンチン社会における日本人の存在認知と在亜邦人社会における沖縄移民の地位向上の双方において大きな影響を与えたことを指摘した。

コメンテーターの木原誠は、文化学と政治学の垣根の存在を鮮明にし、その領域間の接合点を暴力・表象に求めたことに本共通論題の意義があると指摘した。その上で、暴力・表象が意味をなすための前提条件である文化的文脈（文化コードとそれを繋ぐネットワーク）に対する問いが提起された。同時に、空間（名詞）における表象と芸術を通じた活動（動詞）としての表象を共通の論点のなかで捉え直すことの意義が提起された。また、フロアーからは、「文化（学）と政治（学）の接合点」に関する質問や、各報告者の研究動機、着想に至る経緯などの質問があった。セッション終了時には、37名の会員が出席しており、若手研究者3名にとって有意義な意見交換が行われた。

第1報告：深松亮太
「『支配』の表象とプロパガンダ：政治における『逆転のレトリック』と他者恐怖の醸成」
第2報告：田島樹里奈（法政大学兼任講師）
「Re-Imaging:北アイルランドの壁画から見るメディアとアートのポリティックス」
第3報告：月野楓子（関西外国語大学助教）
「南米における沖縄移民社会の戦後と芸能：アルゼンチンを事例に」

※本共通論題の第1報告は、「若手研究者共同研究プロジェクト」（法政大学）の助成を得て行った研究の成果の一部である。（研究課題：「風刺画家たちの人的交流と表現手法における相互影響関係に関する研究」【2019年6月～2020年3月】研究代表者：深松亮太）

【共通論題３】グローバル化におけるアジア社会と宗教文化の変容

伍嘉誠（代表）、清水香基、Lim Taiwei、滝澤克彦（コメンテーター）

本共通論題では、国際比較の視点からさまざまな宗教が実践されているアジア地域を研究事例として、グローバル化における宗教文化の実態を把握し、宗教の役割と多様性の役割について検討した。

まず清水の報告は、近代化にともない各国の経済発展が進行する中で、人々の生活の中での宗教のあり方に、どのように変化が生じているかを検討するものであった。世界価値観調査、ISSP宗教調査といった時系列データの分析を行い、経済的に発展している国ほど、生活にとって宗教が重要であると考える人の割合が低いということが示された。また、そうした国々においては、伝統的な既成宗教の教えや実践から、多かれ少なかれ距離を置く人が増えてきている。他方で興味深いことに、欧米では「輪廻転生」「涅槃」「祖先の力」を信じるといった、いわば東アジア的な宗教的信念を持つ若者が増加傾向にある。欧米では世代間での宗教意識の拡散が生じつつあり、いわゆる「宗教意識の私化」の傾向が認められる一方、結果として欧米とアジアの人々の宗教意識が、相互に接近しつつあるという傾向が報告された。

伍の報告は、返還後の香港における「ナショナリズム」色の強い社会運動におけるキリスト教の役割を考察したものであった。特に、2014年の雨傘運動における、キリスト教信徒集団によって展開された社会運動のリーダーシップ、キリスト教諸組織の声明、デモ隊による占拠地でのキリスト教信者の活動の三つに焦点を当てて検討した。本事例から、①キリスト教信者のリーダーたちのカリスマ性と、②キリスト教の教えに基づいた運動のフレーミングは、香港のキリスト教信者の社会運動参加において重要な影響力を持つことが示唆された。

Limの報告では、多民族国家であるシンガポールの宗教文化の多様性を紹介し、その多様性がシンガポールにおける華人の祖先崇拝の実践に様々な影響を与えていることが論じられた。例えば、シンガポールにいる華人たちは、台湾、香港、中国大陸など様々なルーツを持っており、本来であれば祖先崇拝で使用する道具や供物にも違いがある。しかし、現代でそれらは高度に混ざり合っており、祭器一つをとりあげても、その材質、形状、置き方から、シンガポールの祖先祭祀実践の背後にある多様な宗教文化の混合を見て取ることができる。また、今日では、マレーシア文化・インド文化といった流れも加わることで、一層その複雑さが増す傾向にあることが報告された。

コメンテーターを務めた滝沢からは、現代社会においても宗教が我々の社会・政治・生活と深く関わっていることを再確認させるセッションであったとの総括がなされた。他方、今後の研究では、個人や社会の「リスク」の視点から宗教を考察することが、重要な課題となってくるだろうとの指摘があった。それは今回の報告内容にとどまらず、現代の宗教研究が取り組みうる共通の課題の一つであるとも言え、聴衆も交えて今後の研究の方向づけを検討する上で非常に示唆に富んだ議論を育むことができた。

【共通論題4】国際文化学としてのフランス文化教育

高橋梓（代表）、松井真之介、山川清太郎

本セッションでは国際文化学を構成する二つの熟語、すなわち「国際」と「文化」が我が国の教養教育に深く関連するタームであることに着目し、報告者たちの専門であるフランス文化教育と国際文化学の関連性について議論を展開した。

第一報告　近畿大学講義「国際化と異文化理解」に見る学習者の文化触変
報告者　高橋梓（近畿大学講師）

第一報告ではフランス文学（マルセル・プルースト）を題材として文化触変を引き起こす講義を紹介した。文学を自己分析の手段として用いることで、学習者は異文化の視点を内在化させることが可能となる。その上で文学のトピックに合わせて日本の文化・社会的な素材を分析させることで、異文化の視点が自文化に反映し、新たな解釈を産み出すことが可能となる。報告では講義で使用したワークシートやレポートの分析を通じ、学習者たちが意図せずにフランス人作家の視点を身体化させる様子を具体的に示した。

第二報告　文化触変の実践と「当事者意識」
報告者　松井真之介（神戸大学研究員）

第二報告では歴史・文化的事象を「我が事」として考えさせる仕掛けや事例を紹介した。歴史・文化的事象を学習者にとって身近な問題に読み替え、「当事者意識」を醸成させること、つまり問題提起の方法や学生の巻き込み方を工夫する仕掛け次第で、歴史・文化的事象が身近な問題の解決策として活用できる。しかしこの活用方法は、事象を安易に解釈し、深い理解を得ないまま使用してしまう危険性を抱えている。そのような問題を承知しつつも、報告者は教育的視点からこれをある程度許容し、学生たちが自身の視点でこれらの「教養」を人生に役に立てていくことを、今後の大学教育の目的としたほうがよいと結論づけた。

第三報告　フランス文化ケースメソッドを用いた間文化的リベラルアーツ教育
報告者　山川清太郎（京都先端科学大学）　※急病のため報告は高橋と松井が代理

昨今、経営学や教育学で注目されるケースメソッドは、実際に起こりうる事例（ケース）を教材として利用することで、参加者自らがその立場に置かれた時にどのような思考・行動をするべきかを疑似体験して分析する手法である。ケースメソッド型ワークショップの実践時に、フランス文化の講義を差し挟み、知見を問題解決に利用するよう促すことで、フランス言語学・文学・社会学といった素材が学習者によって再解釈され、日本的な社会問題の解決法として読み替えられる。報告では過去に開催したワークショップの成果報告を通じ、フランス文化教育が現在の日本社会を生きる力に確実に繋がるという見解を提示した。

以上の議論はすべて「異文化をテーマとする教養教育の講義室の中に文化触変の可能性が潜んでいる」という発想に基づく。現在、実用性を欠くとして不要論の矛先が向けられる教養教育だが、国際文化学と紐付けることにより、人文学的教養の社会的意義を明確化させることが可能となるのではないか。

【共通論題5】スポーツと政治

―1934年の第10回極東選手権競技大会から1940年の東京五輪へと至る過程を中心に

鈴村裕輔（代表）、冨田幸祐、中村哲也

「スポーツは、世界共通の人類の文化である。」というスポーツ基本法の前文やオリンピック憲章における政治による影響力からの中立性の維持の規定などが示すように、今日、スポーツは政治から独立した存在であることが求められている。しかし、スポーツ基本法が日本の法体系の枠組みの中に基礎を置いていることやオリンピックが国威発揚や国家間の政治的な駆け引きの材料として用いられていることは周知の通りだ。また、スポーツの側も国内の政治の動向を無視して存立することは難しいし、国際政治の推移から影響を受けることも珍しくない。それでは、何故、スポーツと政治は相互に関わりを持つのであろうか。もちろん、勝敗を決めるという競技スポーツの特徴が、勝者を優等とし、敗者を劣等とする考えと結び付くとともに、国際的な大会の場合はより多くの勝ちを収める国が優れているという観点に繋がることは想像に難くない。あるいは、組織化という近代スポーツの特徴が、各競技団体に対してより有利な環境を得るために政治に接近する機会をもたらす。その意味で、他の分野と同様に、スポーツと政治は相互に依存しあっていると言えるだろう。今回、われわれは、1934（昭和9）年の第10回極東選手権競技大会から1937年の日中戦争開始後に至るスポーツ界の状況を取り上げることで、国家や政治家、さらに国際情勢などを含む政治のあり方がスポーツに与えた影響を検討した。

各報告の概要は以下の通りであった。

(1)冨田幸祐(日本体育大学)／「非国民」「国賊」の代表選手たち　日本における第10回極東選手権競技大会のボイコット運動

1934(昭和9)年の第10回極東選手権競技大会における満洲国参加問題が日本選手団のボイコット運動へと至った過程とそのボイコット運動の様相を通して、当該期の日本におけるスポーツと政治の関係について検討を行った。

(2)鈴村裕輔(名城大学)／オリンピックと政治―1936年の五輪開催地決定と「イタリーの裏切り」を中心に

1936(昭和11)年の国際オリンピック委員会総会で第12回オリンピックの開催地が東京に決定するまでの国内外の状況の推移、とりわけ「イタリーの裏切り」と呼ばれたイタリアの動向を通して、スポーツと政治とのかかわりが検討された。

(3)中村哲也(高知大学)／スポーツ団体の自治と国家のスポーツ統制―ガバナンスコードと野球統制令

1932(昭和7)年に文部省がいわゆる「野球統制令」を発令した要因、内容及び影響を検討することで、現在の日本で進められている「ガバナンスコード」の制定とスポーツ界のガバナンス問題のあり方と「ガバナンスコードを通じた国家による統制・介入」を考察した。

以上の各報告及びその後の質疑応答を通して、スポーツと政治の関係が多角的に検討された。

最後に、今回の企画の実施に際し、貴重な意見を頂戴した参加者及び円滑な進行を支援された実行委員会の皆様に深謝する。

基調講演に耳を傾ける参加者の皆様

基調講演中の王向華(香港大学)氏

公開シンポジウムにおけるパネルディスカッション

フロアの皆様との活発なやり取り

【自由論題A】
記憶と和解

首藤明和（司会）、Tinka DELAKORDA KAWASHIMA、根本雅也、桐谷多恵子、土屋明広

デラコルダ川島会員（広島大学）「世界遺産における聖地の解釈―長崎県平戸市春日集落の事例」報告では、2018年「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界遺産に登録された際、潜伏キリシタンの集落など文化的景観が主要な構成資産となったこと、調査地の平戸市春日集落では、制約された条件下で開墾や生産活動により形成された棚田や家屋などの文化的景観が保護されており、現在も続く信仰や行事とともに資産を構成していることが紹介された。そして、livingであるよりはむしろfossilな文化的景観に基づき、また象徴的な遺産に欠くため、観光客の受け入れに取組む地元住民や平戸市は、世界遺産の価値を理解してもらうために、世界遺産の一般的ストーリーには収まりきらない、キリシタン史以外の平戸の生活や歴史全体のストーリーが求められる課題に直面していることが明らかにされた。

根本雅也会員（日本学術振興会特別研究員(PD)/立命館大学）「ヒバクシャになれなかった被爆者―アメリカに住む原爆被爆者たちの運動史」報告では、在米被爆者の社会運動の歴史を辿り、その運動の背景や意味を説明した。すなわち、(1)1960年代から80年代末のアメリカでの運動では、市民権・永住権を持つ原爆被爆者たちへの社会保障を求める運動が日系社会の協力を得ながら議論されたが、アメリカ政府は戦争犠牲者への補償要求に応じず、保障は認められなかった。その後、アメリカでの反核平和運動を背景に、在米原爆被爆者たちもアメリカの核被害者として他の被害者たちと運動を行ったが、政治的課題としての重要性を得るには至らなかった。(2)90年代からは、政治家からの助言や、日本の国外被爆者に対する支援への期待などから、在米被爆者たちは韓国人や在ブラジルの原爆被害者とともに、日本政府に向けて運動を行うようになったことが説明された。

桐谷多恵子（長崎大学）「沖縄の被爆者調査を通じて見える文化の問題―核時代における新しい文化創造への一考察」報告では、沖縄の被爆者―広島・長崎で被爆し、郷里の沖縄に戻った人びとで、当初約350人、現在130人ほど、うち男性が8割弱、長崎での被爆が7割ほどを占めるが、その背景には三菱重工長崎造船所への県外就職がある―の聞き取り調査などから、本土の被爆者に対しては、1957 年原爆医療法、1968 年被爆者特別措置法が施行され、年 2 回の健康診断や国の医療費全額負担などの救済策がとられた一方で、沖縄被爆者は、本土復帰まで米国のアジアにおける「核の拠点」に置かれた上、本土に比べて 7 年遅れて医療支援が始まったこと、沖縄の被爆者への偏見や差別は根強く、また、被爆体験を語ることで沖縄戦時の不在を後ろめたく思う意識が働くといったインタビュー・データなどを踏まえ、国際関係のなかにおける日本の問題とともに、新しい文化の創造に向けた展望が述べられた。

土屋明広会員（金沢大学）「和解による謝罪と赦し―『花岡事件』についての考察」報告では、「和解による解決」の嚆矢とされる中国人強制連行「花岡事件」に焦点を当てて、「歴史問題」の和解成立条件を考察した。「和解」とは、対立当事者双方が納得して特定の合意に至ることを意味するが、「裁判上の和解」と日常用語としての「和解」には違いがあり、前者は紛争の当事者双方の「譲歩」を成立要件として、成立後の再紛争化は認めないが、後者は「謝罪」と「赦し」を成立要件とし、成立後も加害者側の実践次第では再紛争化の可能性を内在させる。これまでの戦後賠償をめぐる和解交渉で被害者側が求めたものは、後者の「和解」である。確かに、過去と現在との時間的な断層に伴う被害者側と加害者側との認識と記憶のズレ、被害者の死去や加害企業（国）の担当者交代などで広がる当事者間の懸隔、各々の当事者の背後にある国家や文化の違いなど、様々な障壁が和解を困難にしているが、それでもなお「歴史問題」の和解成立には、加害者の「謝罪」と被害者の「赦し」が欠かせない条件だと主張する。

質疑応答では、fossilな文化的景観がlivingな文化触発の場になる可能性や、在米被爆者の実態把握の難しさ、質的調査における方法と分析のあり方などについて議論が交わされた。また、記憶（その地域の人びとが記憶していても、必ずしもその地域の歴史とはならない）と、歴史（その地域の人びとが知らなくとも、その地域の歴史は発見され制度化される）の概念の相違に関連させて、本部会の各報告を捉え直した場合、どのようなことが発見できたり説明できたりするのか、その展望について意見が交わされた。

【自由論題B】
宗教と社会の多様性

小川忠（司会）、ビラール・イリヤス、亀山光明、市岡卓、森島豊

本セッションでは「宗教と社会の多様性」と題して、次の四つの報告が行われた。

第一報告は、ビラール・イリヤス会員による「用語『イスラーム寺院』の適正性の再検討」という題目で、ムスリムの礼拝場所「マスジド」を「イスラーム寺院」と日本語に訳されたケースに注目し、言語表現、宗教理念、施設

内容の差異、という三つの角度から、この訳語を検討する発表だった。同報告は、仏教用語の「寺院」を、イスラームの宗教施設を指す言葉として用いるのは、偶像崇拝を否定し、神の唯一性を基本原理とするイスラームという宗教を現代日本人が理解する妨げになると指摘し、ムスリムが礼拝する場は「マスジド」と称するべき、と論じた。

第二報告は、亀山光明会員が、「西洋の衝撃と宗教実践―明治期における仏教因果説論争に注目して」という題目で報告した。近代日本における宗教概念の特徴は、教義等の言語化した信念体系中心、儀礼的実践等の非言語的慣習行為の排除であり、近代日本の仏教改革とは「教理の合理化」と「呪術的側面の除去」と理解されてきた。亀山会員は、明治期の仏教者、釈雲照の「十善戒」に焦点をあてて「戒律」実践をめぐる議論を検討することによって、仏教が近代的理性によって迷信から解放されるという単純な仏教近代化ではなく、伝統的な知識と理論の体系化等も含めた「仏教が語りなおされるプロセス」という新たな視点を問題提起した。

第三報告は、市岡卓会員による「ムスリムの異教徒との結婚を擁護するシンガポールのムスリムの主張について」と題し、イスラーム内部の多様性に着目するものである。同報告は、シンガポールのムスリムを対象として、ムスリムの異教徒との結婚の是非をめぐる議論を分析し、異教徒との結婚を擁護するムスリムたちが、彼らの生活圏の主流的なイスラームの規範のほか、外部世界の規範も参照しながら自らの宗教実践のあり方を主体に選びとる面があることを、文献および聴き取り調査を重ねて明らかにした。市岡会員が結論で述べた通り、宗教規範に縛られ自己決定に厳しい制約を受けているとみられがちなムスリムのイメージを問い直す必要があるだろう。

第四報告は、森島豊会員が、「タイ北部におけるキリスト教伝播の一要因」という題目で報告した。同報告は、森島会員が新たに発見した1878年10月8日タイ国王によって発布された信教の自由を保障する勅令『宗教寛容令』発布の経緯、成立後の歴史を吟味し、この勅令の存在がタイ北部において比較的キリスト教徒人口が多い一因であることを明らかにした。しかし、この勅令は米国政府の圧力による外交交渉の産物であり、住民が主体的に獲得したものではないがゆえに限界がある。

以上四報告は、テーマ、研究方法は異なるが、いずれもアジアにおける宗教の近代化への対応をきめ細かく吟味するものであり、宗教の存在感が増すアジアの今後を考える上で示唆に富む内容であった。

【自由論題C】
歴史と伝統の再検討

菅野敦志（司会）、藤田賀久、任暁艶、梅山秀幸

本セッションでは「歴史と伝統の再検討」をテーマとして4つの報告がなされた。

第1報告は、藤田賀久会員（多摩大学）「眷村が挑む歴史と文化の発信―台湾現代史の文脈から―」であった。同報告では、国共内戦に敗れ、中国大陸から逃れてきた国民党の軍人・軍属とその家族が暮らしていた眷村と呼ばれるコミュニティの変遷と文化保存の進展について検証した。その結果、眷村の歴史化と保存が必要とされた背景には、台湾内部の多様性の重視だけでなく、外省人がもはや「移民」の一つとして外部化されるという、台湾史の新たな語りによって後押しされた点が指摘された。

第2報告は、任暁艶会員（宇都宮大学大学院生）「手漉和紙技術の「伝統」の再編成における製紙関係機関の役割に関する一考察―小川地方の「細川紙」を事例に―」であった。同報告では、埼玉県小川地方の手漉和紙をとり上げ、製紙関係機関と地方公共団体の間における「細川紙」の説明の差異から、「伝統」の再編成の過程における製紙関係機関の役割が論じられた。その際、重要文化財指定による「細川紙」の上位化およびその「伝統」をめぐる公的基準が持つ柔軟性こそが、小川地方で生産される和紙のアピールを可能にさせているとみられる点が指摘された。

第3報告は、菅野敦志会員（名桜大学）「台湾原住民選手と〈東京オリンピック〉」であった。同報告では、1940年（ただし、1938年夏に返上）と1964年の二つの〈東京オリンピック〉に確認できる台湾原住民選手が紹介され、なかでも、台湾スポーツ史においても忘却された存在であった、ラケナモとカサウブラウという日本統治下で活躍した2名の原住民陸上選手を中心に検討がなされた。遺族への聞き取り調査から明らかとなった両選手の足跡を通じて、戦後躍進する原住民選手の源流が、戦前の東京大会開催に向けた動きのなかにすでに確認できるという戦前・戦後の連続性が指摘された。

第4報告は、梅山秀幸会員（桃山学院大学）「許筠の『洪吉童伝』と西鶴の『好色一代男』、それぞれのユートピア」であった。同報告では、朝鮮時代最初のハングル小説である許筠による『洪吉童伝』および西鶴による『好色一代男』の比較考察がなされ、後者では徳川綱吉の儒教的な徳治主義への批判として女護ケ島を理解する可能性などが指摘された。なお、報告では安堅による「夢遊桃源図」もとり上げられ、それぞれの作品のなかに描かれた“桃源郷”の姿と、そこに見出せる多様な解釈の可能性が示された。

上記の4報告はともに、コミュニティ、和紙、スポーツ、文芸作品といった多様な切り口から、歴史や伝統が構築され、再編成されるプロセスに潜む解釈のあり様とその可変性に着目して検証するものであった。いかなる主体が織りなす関係性が基盤となって各時代の必要性／文化が語られてきたのか、今後もとりわけ若手研究者による斬新な視座からさらなる理解の扉が開かれていくことを期待したい。

【自由論題D】
統合と差異のポリティクス

渡辺愛子（司会）、斉藤理、田中佑実、土谷岳史

本セッションでは、以下の三つの報告が行われた。

斉藤理会員の「『記念碑の細分化』がもたらす文化交流の質的変容について」では、ベルリンを中心にナチス時代に犠牲となった市民たちを記念する「躓（つまず）きの石（Stolpersteine/stumbling blocks）」の普及活動がとりあげられた。「大きな歴史」を印象づける一般的な記念碑建立とは異なり、一般市民の生きた痕跡を小さな立方体の表面に刻印して路上に埋設していくこの文化事業は、まさに「記念碑の細分化」と呼ぶことができる。この活動の実態を綿密に調査することで、戦時に生きた無名の市民たち個々人の記憶が風化することなく、現在・未来にも人々が行き交う路面において、リアリティーを持ち続けることができるという。これまでにベルリンでは約8千個の石が埋設されたが、儀式化をあえて避けた埋設活動を通じて、現代に生きる人々相互の交流に質的な変化が表れていることを知ることとなった。

次に、「フィンランドのナショナル・ロマンティシズムにおける風景画～立ち枯れの木が語るナショナル・アイデンティティ～」において田中佑実会員は、19世紀後半、フィンランドに訪れたナショナル・ロマンティシズムという芸術思潮に、同時期のフィンランドの国家としての独立の気運を読みとろうとした。なかでも報告者が着目したのは、19世紀末から20世紀初頭にかけてフィンランドの風景画に多く描かれた「立ち枯れの木（Kelo）」である。フィンランドの厳しい自然のなかで、葉を落としてもなお、屈強に聳え立つ立ち枯れの木は、支配を行使する周辺国の「文明」に対峙する「野生」の象徴であった。同時代のアーティストたちは、この木を自覚的に描くことで、支配に敢然と向き合おうとするフィンランド独自のナショナル・アイデンティティの存在を具現化させたと考えることができる。

第三報告、土谷岳史会員による「文化、統合、承認～EUの二級市民としてのロマ～」では、EU（European Union）のなかで二級市民とみなされているロマに着目し、EUの制度的枠組みにおける彼らの統合政策ついて考察がなされた。市民の権利保障をめざすEUにおいて、人々の域内自由移動は、当然奨励されるべきものである。そのようななか、EUの安全保障を脅かす可能性を孕んだ「移民」の範疇に分類されるロマは、彼ら本来の文化である「移動」を阻まれている。依然として差別的な立場に置かれるこうしたロマたちの現状を打開するため、彼らをEU市民として統合していく必要性が生じる一方で、統合戦略の過程にはロマの「本質化（人種化）」という、やはり彼らのアイデンティティを揺るがす危険が立ちはだかっている。本報告では、ロマの承認をめぐってEUが直面している諸課題が検討された。

全体を通して、フロアからも積極的な質問や建設的なコメントがあり、本自由論題のテーマを多様な側面からとらえ、熟考する有意義なセッションとなった。

【自由論題E】
国際変動の過去・現在・未来

牧田東一（司会）、阿部 純、
吉川純恵、坂口可奈、飯森明子

本セッションでは、4つの発表が行われた。セッションのテーマに沿って、時代が古い順に紹介すると、飯森明子会員の「汎太平洋協会と日本国際連盟協会―戦間期多国間国際交流をめぐる一考察」の報告、阿部純会員の「日系アメリカ人リドレス運動における調査委員会設置をめぐる一考察―日系NCJARの語りと戦略を中心に」である。日米協会の研究で有名な飯森会員は、戦前の多国間主義の民間団体へと研究の射程を拡げている。発表では政府と民間という区別が果たして妥当であるのか、特に軍部とは別の軍人の動きをどう捉えるかという課題が示された。阿部会員は、戦後の米国日系人の名誉回復運動における非主流派に着目することで、従来の説とは異なる視点があり得ることを示した。同時代のブラックパワー等の少数派の権利要求運動との影響関係などの質問が出された。

坂口可奈会員の「シンガポールのネイション・ブランディングにおける2018年米朝首脳会談」の発表では、シンガポールのブランディング政策が新しい段階に入ったことが述べられた。従来は経済や文化に焦点が当てられていたが、政治的な分野でのMICE誘致に向かっている。吉川純恵会員は、「中国のアフリカ外交」の発表において、近年目覚ましい中国のアフリカ進出を総括的に紹介し、中国外交の一部としての研究の方向性を示した。

飯森会員、阿部会員の研究は国際関係における民間団体研究の意義を示している。従来の政府中心の国際関係分析だけでは見えない部分について、光を当てようとしている。その場合、担い手が多様になり、しばしばイデオロギー的にあるいは利害関係的に異なる複数の団体の相互作用、さらには政府との関係など、一層複雑な分析が必要となる。そうした方向を示唆する発表であったと思われる。坂口会員、吉川会員の研究は政府の行うpublic diplomacyに関連する分野であり、現代の国際関係においては、政府は広報や援助などを多様に使いながら、政治・軍事・経済といったハードパワー以外のソフトパワーを活用しようとしており、それらにも目を向ける必要性を示していると考える。

【自由論題F】
表象の中の社会と歴史

葉柳和則（司会）、中川拓哉、
林宜佳、髙住直樹、鄺知硯

自由論題F「表象の中の社会と歴史」は、発表予定だった髙住直樹会員の出席が叶わなかったため、若手研究者3人による報告が行われた。

第1報告では、中川拓哉会員（名古屋大学）が、「『日本遂に独逸に及ばず』―戦時下日本におけるドイツ

映画の位置」というタイトルで報告を行った。『新しき土』(1937)、『国民の誓』(1938)等の日独合作映画と『意志の勝利』(1934)等のドイツ映画に現れる対独関係を軸に議論は展開した。日本映画は常に欧米の映画に対するアンビバレンスにあった。一方には強い憧憬と賞賛があり、他方ではそれらに追いつき、日本(映画)の固有性を主張したいという願望が存した。戦時体制に入るに連れ、アメリカ映画は排除され、ドイツ映画が中心となった。日独合作映画を通してドイツの映画技法を日本の映画制作者が学ぶ過程で「国民的性格を持つと共に、芸術性と指導性において高いものでなければならない」、これによって「国際性」を獲得するという理念が掲げられた。以上を踏まえて、戦時期の日本映画は、「日本遂に独逸に及ばず」という自己認識に至るという結論が示された。

第2報告では、林宜佳会員(東北大学)が、「カズオ・イシグロの作品における回想—川端康成、プルーストと比較して」というタイトルで報告を行った。カズオ・イシグロの『遠い山なみの光』(1982)、『日の名残り』(1989)における「回想の描写」と「主人公の心象」の関係性に焦点を当て、それを川端康成やプルーストの小説における類似した場面と比較することで、イシグロ作品の特徴を明確にする方向で議論は展開した。議論の中心に置かれたのは、人間は自分自身の過去について過不足なく語ることができない、すなわち、自分の過去に直面することの不可能性である。これは、物語的な完全性や完結性を書いたナラティヴ、あるいは他者のことについて語ることで自分自身について語るという物語構造を生み出す。報告者はこうした語りの構造に、川端やプルーストにおける語りとの類縁性を見出すことができると結論づけた。

第3報告では、鄭知硯(東北大学)会員が、「震災映像における外国人移住者の表象」というタイトルで報告を行った。具体的には、ドキュメンタリー映画『東日本大震災 東北朝鮮学校の記録　2011.3.15-3.20』(2011)と『すぐそばにいたTOMODACHI』(2011)を取り上げ、映画における在日コリアンと在日ビルマ人の表象に見られる「外国人」イメージとその裏返しとしての「国民」イメージの関係性に光を当てた。震災が発生した後、メデイア報道における「外国人」のイメージは、「帰国ラッシュ」と「献身的な外国人」という2つの類型に分かれた。しかし、この二項対立は、「外国人」と「国民」との多様な関係性のあり方を不可視化することにつながり、さらには、「外国人」と「国民」とを相互排他的なカテゴリーとして捉える暗黙の前提に対する批判を背景化させる。震災に関する膨大な映像群における「外国人」に関する表象研究という領野の広がりを示す報告であった。

3つの報告は、一見したところつながりのないテーマを扱っているように思われるが、20世紀以降における広義のメディア表象に関する研究の対象(what)と方法(how)に関する問題意識に裏打ちされているという点では共通している。他方で、従来の実証的なテクスト研究や歴史研究の方法が、若手研究者の仕事の中でどのように乗り越えられているのかという問いも、質疑応答を通して浮かび上がった。これは「国際文化学」という学問分野それ自体にとっても避けて通れない問いなのではなかろうか。

【自由論題G】異文化交流の実践

上原良子(司会)、山口祐香、相原征代、大場智美, 中野聡

自由論題G「異文化交流の実践」では、トランスナショナルな交流に関する四本の報告が行われた。研究・教育の多彩な手法・視点が報告されたが、新たな研究・教育の可能性を広げる極めて示唆的な論点が多く、活発な議論が交わされた。

山口祐香会員(九州大学)の「在日朝鮮人知識人の歴史実践とトランスナショナル交流空間の形成」では、在日朝鮮人自らが歴史展示を試みた実例として辛基秀の活動と「青丘文化ホール」の設立および活動の分析を試み、「歴史を語る場」の意義と関西を中心とするトランスナショナルな知的ネットワークの重要性が報告された。加藤会員からは在日文化および交流の変化について質問が寄せられ、日本に根ざしたコリア系日本人として生きる肯定的なエスニック・アイデンティティと、相互に交流することの重要性が指摘された。

相原征代会員(岐阜大学)による「国際化と地域振興－『安心できる町』が外国人を呼ぶ理由－」では、町おこしで注目を集める北海道東川町の事例を取り上げ、全国初の公立日本語学校の成果が報告された。成功の要因として寮、受入体制の整備に加え、町民・留学生双方に「安心」を生み出したことが明らかにされた。若林会員からは人口や費用、人員の手配について、また松井会員からは地域の雇用のあり方等について質問があり、ボランティアや支援体制の重要性、また町内での人材活用、そして地元への還元等が強調された。

大場智美会員(多摩大学)による「コミュニケーション能力の育成を目指した大学における短期海外研修－包括的な視点から－」では、多摩大学で実施されたディスカバーアジアスタディーツアーを通じた成果と課題が報告された。研修の成功のためには、現地との交流だけでなく、教員/研究者－職員－学生間－保護者との包括的な協力体制の重要性、リスクの共有化・事故時の情報把握、高大連携等異世代および障がい学生とのコミュニケーション等の重要性が明らかにされた。大学での研修は高校と比較して、教員の選定、情報共有、学生の情報把握・共有等事前準備が不十分であり、リスクを高めているとの指摘は有益であった。

中野聡会員(一橋大学)の「Looking into Landscape, Looking into History—Google Satelliteから始める現代史授業実践の試みから考えたこと－」は、Google Satelliteとフィールドワーク、グループワークを用いた参加型・学際的な歴史教育の成果報告である。「場所に刻まれた歴史」「歴史が刻まれた場所」といった場の記憶をめぐる検証は承認のポリティクスを考える契機でもあり、「歴史のあざ」を考察する意義が明らかにされた。岡崎会員からはフィールドワークにおける発言と行動が異なる可能性について質問があり、インタビューにおける質問の実施方法に留意すべき点等が確認された。

【自由論題H】
思想と言語からたどる日本社会

岡田浩樹（司会）、古家聡、増渕佑亮、
大槻くるみ、長妻三佐雄

自由論題H「思想と言語からたどる日本社会」では、古家聡、増渕佑亮、大槻くるみ、長妻三佐雄の4氏による発表が行われた。古家氏の発表は「日本人集団主義を再考する」であった。発表では、先行研究における実証主義的研究と表層的な集団主義性の間にあるギャップに注目した上で、「我利追求」と「利己的協調主義」という2つの原理が価値判断の核となっていると想定する。結論として、「日本人の『集団主義』は、者の利益が自己の利益にもなるという『利己的協調主義』のような概念に捉えなおしうるというものである。

次に増渕佑亮氏の発表のテーマは、「「学問名＋をする」と「学問名＋する」で意味が大きく異なるのはなぜか」であり、学問名＋「をする」と「する」の相違に着目し、議論を行ったものである。この発表は、名詞から動詞への転換についてClark & Clark 1979のクオリア構造を援用した発表者の中心的な研究テーマを基盤に、「学問名＋をする」「学問名＋する」という具体例を用いて議論を試みた内容であった。ただし、基盤となる転換論やクオリア構造自体、動詞の意味形成論の枠組みの中で理解されるのが望ましく、限られた時間の中でやや説明不足の印象があった。

三番目の大槻くるみ氏の発表「日本語話者の主観性の変化と人口移動および国際化の関係」では、日本語話者の主観性の通時的変化について中古から現代までの和歌を対象として、一人称代名詞<われ>の明示頻度に着目し、先行研究による一方向的な変化ではなく、<われ>の明示頻度が中古、近代、現代で高く、中世と近世で低いというS字の変化を辿っているという新しい知見を明らかにした。その上で変化の要因についても考察を試み、都市圏などで人口集中が起きた時代には、話者自身が客観的に事態を観察し、主体と客体の関係を明確にした上で提示する必要があり、一人称代名詞<われ>の明示頻度に変化が起きたという仮説を提示した。発表では、現在の日本社会の多文化化における変化についても言及し、今後の研究の発展が期待される。

最後の長妻三佐雄氏の発表では「東井義雄と雑誌『思想の科学』として、兵庫県の教育、地域コミュニティの形成に尽力した東井義雄をとりあげた。本発表は、この東井義雄の「実感主義」に対する鶴見俊輔の批判的東井論についての発表者の先行研究を踏まえ、鶴見の議論を受けた東井義雄の思想的営為についての報告である。本発表は丹念な資料渉猟を踏まえた実証的研究報告であるだけでなく、戦後の時代思潮と地域の実践的活動家の相互関係を検討する上で重要な視点を提供していた。

以上、自由論題H会場では分野も対象もテーマも異なる4本の発表がなされ、いささかセッションのとしての統一性に乏しく、聴衆も発表者ごとに異なっていた。学際的な日本国際文化学会では、専門的な研究成果の発表だけでなく、発表者相互および聴衆と共有する基本情報の提示があることが好ましい。司会者の能力の不足から、本まとめがセッションの「まとめ」とは言いがたいことを最後にお断りしたい。

【自由論題I】
越境する人、文化、アイデンティティ

杉村美紀（司会）、賽漢卓娜、王維

本部会の目的は、日本で暮らす華僑・華人をパネリストに招き、老華僑と新華僑それぞれに内在する「中国性」といかに向き合うか、そして自分自身のアイデンティティをどのように認識してきたのかを、自分史の語りという手法をとることで考察することにあった。

部会では、はじめに、王維氏（長崎大学多文化社会学部教授）より、今日の日本における華僑・華人と呼ばれる人々は、来日時期、職業、教育など、日本での生活環境と日常生活の実践によって多様化しており、アイデンティティの変容と日本の社会を関連づけて実証的にアプローチすることが華僑・華人研究の重要課題になっているという問題提起が行われた。次いで、賽漢卓娜氏（長崎大学多文化社会学部准教授）より、「中国につながる子どもたちのアイデンティティ形成」と題して、在日華僑・華人社会が多様化し、さらに越境化・混淆化が進むなか、世代を重ねる中で華僑・華人の間には多様で重層的なアイデンティティが形成されているとの指摘があった。こうした分析枠組みを共有したうえで、林敏幸氏（長崎ランタンフェスティバル実行委員会前幹事長、長崎新地中華街中華料理店会楽園会長）からは、「『帰化』を経験する華人のアイデンティティの変動」というテーマで、日本への帰化という経験とキリスト教を信仰してきた親世代のもとで、二世として自身が経験してきたアイデンティティの在り方を、また曹祐仁氏（神戸南京町振興組合理事、老祥記社長）からは、「チャイナタウン生まれの華僑のアイデンティティのあり方」について、曽祖父、祖父、親の世代から継承してきた店と、共に取り組んできた神戸南京町の「まちづくり」を軸に、自分のアイデンティティについての語りがあった。一方、張理佳氏（朝日新聞勤務）からは、「大人になった『移動する子ども』のアイデンティティ」ということをテーマに、中国名と日本名をともに持っている状況の中で、自身のアイデンティティもまた多様性をもっているという報告があった。さらに吉満龍亮氏（長崎大学多文化社会学部学生）からは、親世代が日本と中国それぞれの出身であるという立場から「日中『ハーフ』のアイデンティティ形成」というテーマで自分史を振り返る語りが報告された。

本部会における越境する人々とその文化に焦点をあてた議論は、華僑・華人のみならず、在日外国人社会全般を分析するうえでの共通の研究課題であり、多文化共生を目指す日本社会がエスニック・アイデンティティというものをどのように捉え直すかという視角を示唆するものであった。それは、アイデンティティを文化本質主義の立場から固定的なものとみなすのではなく、個々人の置かれた社会的文化的状況のなかで、アイデンティティそのものもまた変容するものであるという文化構築主義的観点である。このことは、2019年4月に始まった外国人労働者の新たな受け入れ枠組みのもと、社会の多様化、多文化が加速することが予想される日本社会にあって、越境する人々のもつ文化的多様性を相対的にとらえることの必要性を促すものといえる。

エクスカージョンのご報告

大野教会
百周年記念碑

垣内キリシタン墓地

旧出津救助院の外にて記念写真

大野教会

ヌルガリエヴァ・リャイリャ　（長崎大学）

7月5日（金）に行われたエクスカージョンでは、遠藤周作の『沈黙』の舞台でもある長崎市外海地区の潜伏キリシタンの信仰の痕跡、および明治期カトリック再布教関連の遺産を訪ねました。多摩大学の大会に引き続き、今年の大会も豪雨の心配がありましたが、幸運なことに当日は雨が止み、無事に計画通り実施することができました。

約20名の参加者は長崎駅に集合後、まず垣内キリシタン墓地を訪れました。佐賀藩や大村藩は禁教令を受け、キリシタン墓地を破壊し、仏教式に改めさせていましたが、垣内キリシタン墓地は破壊を免れ現存していることが、2012年に確認されました。

次に2018年に世界文化遺産に登録された「出津集落」と「大野集落」を中心に、枯松神社（神社を偽装したキリシタンの聖地）にも足を伸ばしました。「出津集落」は、18世紀に外海出身の潜伏キリシタンが五島列島などの島々へと移住した後も、聖画像や教理書、教会暦などを伝承して自らの信仰を続けた潜伏キリシタン集落です。枯松神社は、伝説の伝導士バスチャンの師であるサン・ジワン神父を記念して明治期以降に建てられたキリシタン神社です。神社の手前に“祈りの岩”と名付けられた大きな岩があります。迫害時代、キリシタンたちは「悲しみ節の夜」にここに来て、この岩影でオラショを唱えていたと伝えられています。

1879年外海地方に赴任した、フランス人宣教師マルコ・マリー・ド・ロ（Marc Marie de Rotz）神父は地域住民を窮状から救うために、農業、漁業、医療、教育など様々な活動をしましたが、旧出津救助院も、その一つで、女性のための授産施設として1883年に創設されました。

ここでは、ド・ロ神父についてシスターから興味深い話をうかがい、神父がフランスから輸入したオルガンを使ってシスターの美しい歌を聞くことができました。このような貴重な瞬間を忘れないようにするために、記念写真を撮りました。

次に訪れたのは大野教会でした。1893年、ド・ロ神父の設計施工によって出津教会の巡回教会として建てられた、玄武石を外壁にした和瓦葺きの建物です。山が海に急に落ち込み、平地もない場所にたたずむ小さいながらも美しい教会です。

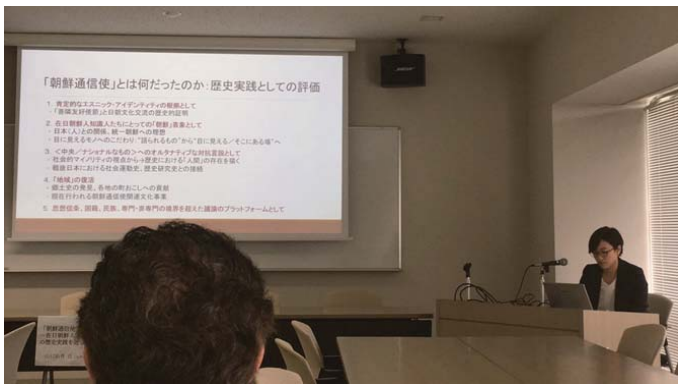
ド・ロ神父の農場跡地やバスチャンの隠れ家を回って、いよいよエクスカーションが終わろうとする頃に、ちょうど外海の美しい夕日を見ることができました。

今回のエクスカージョンは、日本の西に位置する貧しい漁村にカトリックの宣教師が足を踏み入れたとき、人と人が、文化と文化がどのように出会ったのかを追体験することのできる旅となりました。

国際文化学会　若手研究者紹介

今回の「国際文化学会　若手研究者紹介」のコーナーには、山口祐香氏（九州大学大学院）に、そして、「平野健一郎受賞者紹介」のコーナーには高橋梓氏（近畿大学）にご寄稿を頂きました。

山口祐香　（九州大学大学院）



学会発表中の様子（国際高麗学会全国大会）

釜慶大学での北東アジア若手研究者セミナーにて
（手前から2列目、左から2人目が山口氏）

日本国際文化学会には、博士課程進学の頃に入会し、現在に至るまで大変お世話になっていますが、特に昨年の全国大会での自由論題発表を予定していながら、西日本豪雨のため結局欠席してしまうことになったにも関わらず、今年の全国大会では皆様からお声かけ頂きとても嬉しかったのを覚えています。最初に本学会を知ったのは、近しいテーマの研究をしている先輩が勧めてくれたことがきっかけですが、多様な研究テーマや背景を持つ様々な研究者の方々と出会い、懐の深い雰囲気で受け入れて下さる学会に所属していることを幸運に思います。

私は修士論文では、朝鮮通信使の顕彰事業を行う日韓の市民団体に着目し、両国内で朝鮮通信使の歴史が認知され、日韓を代表する国際交流事業へと発展し、ユネスコ記憶遺産日韓共同申請を実現した過程を取り上げました。現在は修士論文のテーマを発展させ、在日朝鮮人知識人を中心アクターに据え、朝鮮通信使を始めとする日本と朝鮮半島の関係史に着目した彼らの活動や言説を取り上げ、歴史文研究などの「歴史実践」の活動を通じて、肯定的な自己認識・民族意識を目指した営みを描こうとしています。特に、対象とする在日朝鮮人知識人たちを中心に、日本や朝鮮半島の多様なアクターたち（研究者、在野の郷土史家、行政担当者、市民運動家、アーティスト、教員、地域住民など）が接点を持ち、関西圏を中心に研究や交流を通じたトランスナショナルな知的ネットワークが形成されている点が非常に興味深く、調査を進めています。戦後日本の社会運動史や在日朝鮮人運動については既に膨大な選考研究の蓄積がありますが、本研究は、こうしたアクターの歴史実践により、彼ら自身のアイデンティティが確立されると共に、長らく日本国内で不可視なものとされてきた「朝鮮」の存在と日本との関係が再発見され、そして差別の対象ではない多様な「朝鮮」の側面や向き合い方が多くの市民に向けて提示された過程を明らかにすることを目指しています。研究においては、先行研究や文献資料などの他に、関係者へのインタビューを何件も行うことで、当事者だからこそ語ることのできる活動の裏話やその時代の雰囲気に触れることができ、今の内だからこそ聞ける「声」を集めていく作業のかけがえのなさを毎回感じています。

また、現在の研究テーマである歴史実践と通じる今後の課題ですが、現代の人々が様々な機会や媒体を通じて「歴史的・文化的ものと関わる」行為全般、またそうした現象を生み出す「場」（たとえばメディアなどの媒体、国際交流の施設や大学、私的な研究会、ミュージアムなど）や人的ネットワークに強く関心を持っています。また、関西や九州といったローカルな地域において、そうした歴史実践がいかに立ち現われ、機能していったかということにも興味を持っています。

現在は再来年の博士論文提出を目標にしているので、研究に目下邁進中です。また、最近は日韓関係の深刻な悪化が取り沙汰されていますが、学部生の頃から日韓交流活動や地域活性化活動にも取り組んできており、将来的には専門分野において学術的な成果を残しつつ、アカデミアと非アカデミアを繋いで広く社会に貢献できる研究者になりたいと思っています。

今までも学会を通じて、国際交流や文化の在り方などについて本当に多くのことを学ばせて頂いてますが、私のような九州からの参加者や九州近郊での研究会開催などが少ないように思われるので、そのような機会が増えるととても嬉しいです。学会員の皆さまには、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

国際文化学会　平野健一郎受賞者紹介

高橋梓氏（近畿大学講師）は、第9回平野健一郎賞を受賞され、第18回の全国大会において表彰式が行われました。受賞論文は「堀辰雄『大和路・信濃路』の半跏思惟像の表象に見る普遍文化的特性ーマルセル・プルースト受容との関連において」です。

高橋 梓（近畿大学）

第9回平野健一郎賞の受賞式

第9回平野健一郎賞を賜りましたこと、平野先生のご研究を手がかりに国際文化学を学び始めたものとして、とても光栄に存じます。

私は東北大学大学院国際文化研究科で学び、「国際文化」の学位を取得しました。しかし「国際」と「文化」という茫漠とした概念の中に埋もれ、「国際文化」を掴み切れぬ日々を過ごして参りました。学位取得後の2016年の第15回全国大会で初めて平野先生のご講演を聴き、その場で『国際文化論』をネット注文して、貪るように読みました。作品冒頭の「国際関係を文化で見る」という明快な定義に巡り会った瞬間は忘れることができません。それまで掴みかねていた「国際」と「文化」が噛み合い、自分の専門とする「文化」で「国際関係」を読み解く、という方向性が明確化したことを覚えております。

受賞論文となった「堀辰雄『大和路・信濃路』の半跏思惟像の表象に見る普遍文化的特性ーマルセル・プルースト受容との関連において」では、「対異文化ベクトル」「対自文化ベクトル」という概念を導入しました。これは「研究方法」と言うよりは、自身に国際文化学が身体化したことで自然と生まれたものです。「国際関係を文化で見る」という試みは、研究対象であるフランス文学（マルセル・プルースト）と真摯に向き合ったときに、不可避的に実践できました。プルーストを熟読し、体内化させた自分が、プルーストの「眼」で世界を見ることにより、身の回りがプルーストの様々な主題と融合していくように感じたのです。私の受賞論文は、私と同じプルースト読者である堀辰雄の視線を辿るものです。プルーストの眼を宿した堀が眺める日本文化の表象の分析を通じ、日本とフランスという異質な文化圏を貫く普遍性を見出すことを目指しました。言い換えるとこれは自分に起こり得たことを堀作品の中に探る試みです。私にとって国際文化学は「異文化の眼」を宿すことによって「文化と文化のあいだ」を生きることに他ならず、人生と研究を繋ぐ学問なのです。

奇しくもこのたびのニューズレターには、第18回大会の共通論題報告と、第19回大会の開催校挨拶を載せております。共通論題報告でも述べておりますが、私は上で述べたような思いから、国際文化学が極めて教育的であるとの確信を抱き、学生が間文化を生きるための視点を獲得できるような授業を模索しております。そして学生に国際文化学の豊かさを伝えるために、近畿大学で第19回大会を開催させていただくこととなりました。大会を通じて自分の人生と研究を繋いでくれた国際文化学の素晴らしさを学生に伝え、自分もまた学びを日々の教育に発展させることを切望しております。

最後になりましたが、私が国際文化学にたどり着いたのは、国際文化学を生み、育ててきた先輩方のおかげに他なりません。平野先生はもちろんのこと、日本国際文化学会の関係者の皆様、そして何よりも国際文化学に至るプルースト研究を導いてくださった東北大学大学院国際文化研究科の恩師に深く感謝いたします。

事務局からのお知らせ

【研究会募集のお知らせ】

研究会活動の企画運営にご活用ください。
・申請金額：10万円まで（１～２件程度）
・申請締め切り：随時
・申請方法：学会ホームページより様式をダウンロードし、学会事務局宛に提出（メール添付あるいは郵送で）。
・結果の通知：直近の常任理事会で決定し、結果をお知らせします。
・研究会の実施期間：2020年３月末まで。
・研究会実施については以下の３点を条件とします。
　－共催として「日本国際文化学会」を明記する。
　－学会メンバーの研究・交流・発信活動を支援するものとし、非学会員の講演等が主となるような場合は、そこに学会メンバーも参加をするプログラム（報告、対話、ラウンドテーブル方式による議論等、様式は自由）を用意する。
　－開催前に学会ホームページおよびニューズレターの研究会開催コーナーにおいて周知することを了承いただき、また、開催後１か月以内に400～800字程度の報告書を提出して、これを学会ホームページおよびニューズレターで報告することとする。

【年報『インターカルチュラル』博士論文紹介記事の投稿を募集しています】

博士の学位を投稿締切日までに取得ないし取得確定したことを申告する会員は、年報『インターカルチュラル』の博士論文紹介欄にその要約を発表することができます。入会申し込みと同時に投稿することもできます。ご応募お待ちしております。

なお、投稿原稿の書式は次の通りです。

①　会員氏名（英字表記を並記する）
②　専門分野・研究機関（在籍のとき）
③　博士論文表題
④　論文提出先ならびに提出年月日
⑤　博士号取得ないし取得確定した年月日
⑥　論文概要　日本語で2,000字～2,150字（本誌２頁）の範囲でまとめてください。
但し本誌のページ割りの都合で文字数の調整をお願いすることがあります。
ワープロソフトはワード等の一般的なものを使用してください。

・投稿締切日：2019年11月7日　著者による初校・再校を実施します。
・掲載誌発刊：『インターカルチュラル』第18号（2020年3月刊行予定）
・投稿原稿送信先：年報編集委員会あて　editorialboard.intercultural@gmail.com

ICCO発表会の様子

今回の全国大会は長崎県長崎市の長崎大学文京キャンパスで開催されました。歴史ある長崎で、非常に温かい雰囲気の中、大会は進められました。一つ一つの発表は国際文化を考える上で非常に興味深く、有意義なものでした。フロアーとのやり取りも活発で、発表が終わった後も教室で残って話し合いが行われるなど、非常に盛況でした。

特に興味深かったのがICCO発表会での参加学生3名によるプレゼンテーションです。合宿という限られた時間の中で、初めて出会ったチームメートと沖縄でのフィールドワークを豊かに行った様子がとても伝わってきました。学生はもちろんですし、それを支えられた先生方にも深い敬意を抱きました。

【学会事務局：竹内】